
魔法少女リリカルなのは ~ Broken my destiny ~

来電

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Broken my destiny

【Nコード】

N9288X

【作者名】

来電

【あらすじ】

今日もいつも通り仕事をするだけの筈だった。
依頼は管理局のエース高町なのはの暗殺、だが成功しなかった、それどころか突然の乱入者によって瀕死の重症を負った。

だが何者かに助けられ次に目を覚ましたのはアルハザードだった。
そこから新たな物語が始まった。

第1章 始まり（前書き）

来電と申します。

第1章です！

グダグダだとは思いますが、読んでいただければ幸いです！

第1章 始まり

何故こんなことになった？

あたりには自分のものであるう血が飛び散っている。

始まりは1つの依頼からだった。

暗殺する予定のターゲットの名前は高町なのは管理局のEーS級の高ランク魔導師、俺たち犯罪者と呼ばれる者たちから見れば天敵である。

真正面から向かって行くようなおろかな事はしないが、もし真正面から攻めれば、こちらの射程に入る前に、砲撃による攻撃で即御用になるだろう。

魔法の使えない俺は特別に取り寄せた質量兵器である、M82A1を構えた。

「よし、そのままこっちに出てこい。」

照準はぴったりターゲットの頭部をとらえている、あとは射程に入るのを待つだけだ、一瞬その容姿に見とれてしまったがそれも一瞬の事だ、すぐに頭を切り替え射撃に集中した。

あと、50m ほどで射程に入るところちょうど引き金に指が乗ったときだった。

「動くな。」

驚き、後ろを向くと同時に右足のホルスターからワルサーP99を引き抜くと銃口を向けるより速く、黒い髪の男はワルサーP99型

のデバイスを素早く撃ってきた。

その弾は実弾ではなく、魔力弾だった。

その魔力弾は男のワルサーを綺麗に撃ち抜いた。

「なに！？」

足下に落ちたP99を見ながら驚いた。

抜き撃ちについては、多少の自信があったが、相手はそれより倍・いやそれ以上の速さ・まさにも止まらぬ速さとはこの事かと、自分より格上の相手に目を向けると相手の銃口が光つたのを見た。

それから数秒後、胸に衝撃が走りその場に背中から倒れた。

胸からは生暖かい血が溢れている。

「まったく・・・護衛がついてるなんて聞いてねえ・・・それも非殺傷切ってんのかよ・・・畜生・・・」

そのあと、意識は薄れていきやがて完全な闇が訪れた。

死んだ・・・確実にそう思った何より心臓を撃ちぬかれて死なない人間は絶対にいない。

しかし、不思議なことに空が目に入った。

夢かと思い、思い切り抓ってみたが、痛かった。

「痛え・・・ここは・・・何処だ？」

「気がついた？」

「誰だ！？」

思わず太もものホルスターに収納されているワルサーP99を取り出そうとしたがそこに愛銃は無かった。

それどころか、声や背丈、衣服まで変わっているがそんな事を気にしている暇など無い、目の前の赤色の髪の少女を警戒しながら周りを確認し、武器になりそうなものを捜した、すると布団を被らされて寝ている人間の左太ももあたりに銃らしき形のものがあった。それに飛びつき、引き抜くとそれは愛銃として長らくお世話になったワルサーP99だった。

これの扱いなら慣れている・・・そう思い慣れた手つきで弾薬を確認、装弾し未だ一連の行動を見ている赤色の髪少女は向けられた銃を見ている。

「それで私を撃つの？」

「取りあえず聞きたいことが幾つかある・・・1つここは何処だ？
2つ俺に何をした？3つ俺の銃は何処だ？」

「わかった、1つ目ここはアルハザードの医療施設、2つ目死にそうなあなたの体を回収してここにあった身体に記憶転写した、3つ目死んだあなたが持っている因みに今持つてるのがアナタの銃もう1つはアナタの横においてある。」

指を指して示された方を見ると確かにM82A1がそこに立てかけられていた。

ふと視界に入った鏡に移る自分の姿を見て驚いた。

そこに映っていたのは本来の茶髪ではなく黒髪、瞳も緑色と金色になっており完全に見知らぬ人間に変わっている。

「マジかよ・・・おい・・・。」

「いつまでも、そんな格好していてもなんだから、服持ってくるね。」

あまりに突然すぎて頭の中が真っ白になっていた。

そもそも、アルハザードが存在していた事にも驚きだが、それ以上に身体が違うことに驚きだし、この身体でオーバースの魔力の持ち、桁外れの身体能力と演算能力を有しているのに加えスキル・次空間移動というスキルも持ち合わせていた。

管理局に見つかったら間違いなく保護^{かくほ}されるだろう。

「入るよ?」

すると先ほどの少女が服の沢山入った袋を持てる限り持ってきていた。

「選ぶのが面倒だから、持てるだけ全部持ってきてやった。」

「そつえば、お前名前はなんていうんだ?俺はヴィーク・ウエバー元々はフリーの傭兵だ。」

「私はイリス・アルフォア代々ここアルハザードの監視と管理をしてる。」

持ってきてくれた服の中に黒のスラックスに黒のTシャツ黒のロングコートを羽織りコンバットブーツをはいた。

とにかくこのふざけた空間から出なければ、これからの事は出てから考えればいい、そう思い窓から見えていた転送ポートらしき機械

の元に向かい起動させた。

「あ！？それは違う！転送ポートじゃない！！」

イリスが急いで止めようとしたが時既に遅し、ポートが開きヴィークはもちろん止めに入ったイリスも巻き込み、転送された。

次に目を覚ますと先ほどとは違い鬱蒼と生い茂る森の中だった。近くにはイリスが座っていた。

「なあ、どうということだ説明してくれ。」

「ええ、アナタの乗ったポートは過去に行くもの、座標が特定されていなかったからここが何処かまではわからない。」

「ただ、わかるのは……。」

「2人の魔導師のちょうど真ん中にあるって事だな。」

どうも最近は運が悪いらしい、仕事中に殺されるわ、転送ポートを間違えるわ、拳げ句戦闘体勢の整い一触即発の状況の魔導師の間地点に転送されるわ、最早た溜め息しかでない。

「まさか！管理局員かい！？」

近くにいる狼が叫んできた。

「いや、違う俺はレイ・ライトニングただの傭兵だ。」

「私は、イリス・アルフォア同じく傭兵だから。」

もちろんレイ・ライトニングという名前は偽名だ。
職業柄、本名を明かしてしまうのは不味いため偽名を名乗る癖がついてしまった。

すると金髪の少女は近くにあった宝石のような物を掴み、必死で押さえ込もうとしていた。

反対側でアスファルトに沈んでいる少女には少し見覚えがあった。
つい先日邪魔が入り唯一達成が出来なかった依頼のターゲットであった高町なのはだ。

しかし、スコープ越しに見た顔よりはかなり幼かった。

そこでレイは高町の履歴書を思い出した。

8歳のとき、P・T事件と闇の書事件等の事件解決に多大に貢献したと書いてあった気がする。

「じゃあ、今は何処に当たるんだ？」

「あれは、ジュエルシードだね。」

「じゃあ、今はP・T事件の真つ最中ってことか。」

そう言う和金髪の少女はジュエルシードの封印を終え、よろよろと立ち上がり歩き始めたが今にも倒れてしまいそうだ。

「チッ！仕方ねえな、ほら肩貸してやるよ。」

そう言うレイはフェイトをイリスはなのはの方に向かった。

「あ・・・ありがとうございます・・・。」

「気にすんな、善意だ。」

「でも・・・。」

「気にすんなって言ってんだ、おまえの相方が来る迄だ、そうだな・・・。」

肩を貸して、歩いていくと案の定相方が走って来るのが見えた。

「フエイト！」

そう言ったあと、こちらを睨んできた。

何故か助けたのに睨まなければならないのか若干不満を覚えたが、まあ気にしない事とする、どこかで聞いたような名前だった様な気がするが、どこかにいつてしまったため今となっては聞くことが出来ない。

・
イリスはなのはを背負ってこちらにつれてきた、管理局員になって犯人に砲撃を打ち込むようになるのはまだまだ当分先の話したが・

そこにはまだ幼くはあるが高町なのは本人がいる。

若干の冷や汗と若干の拒絶反応が出たが、なんとか話しができた。

「な・・・名前何っていうんだ？俺はレイ・ライトニング、傭兵だ一応な。」

「はい！高町なのはって言います！！」

その名前を聞いたとたん銃で自分の頭を撃ち抜きたい衝動に駆られたが、なんとか押さえ込んだ。

「あゝいい名前だな？」

「ありがとうございます！」

「イリス、高町なのはを家に送ってやってくれ。」

「私は、アナタの奴隷じゃないよ！」

イリスはレイに反抗してきたが、未来のエースを背負えているという嬉しさが、顔に出ていたそのため任せたのだが、行かないというなら仕方がない。

「じゃあ仕方ねえ、俺が背負って送って来るから、取り敢えず宿を取っておいてくれ。」

「えゝ。」

「おまえが、行かねえっていうから仕方ないだろ？」

そう言うとなのはを背負いなのはの家をめざした。

第1章 始まり（後書き）

ここまで読んで頂きありがとうございます！

感想や誤字脱字などありましたら、できる限り直ぐに訂正いたしますので、御手数ですが発見されたならば報告していただければ幸いです。

今後もしよろしくお願いいたします！

キャラクター紹介（前書き）

キャラクター紹介です。

グダグダだとは思いますが読んでいただければ幸いです。

キャラクター紹介

名前：レヴィアス・フォン・シュバルツラング

偽名：ヴィーク、レイ、ラング等

性別：男

年齢：9歳（死亡前は18歳）

魔力光：白銀（死亡前は使用不可）

スキル：空間転移

魔力ランク：S S（推定）

デバイス：ウルサーP99、M82A1（ライフル）、サバイバルナイフ

容姿：短めの黒髪に緑色と金色の虹彩異色、常に黒いスラックスに黒いシャツ、黒いコートを着用しコンバットブーツをはいている、普段コートに隠れているが腰に家を出る際に渡された自分の名前と家紋が刻まれたサバイバルナイフを装備している。

性格：基本的には面倒くさがりだが困っている人等見過ごせないが、使えないと判断した場合は容赦なく射殺する冷徹な一面もある。

説明：暗殺から要人警護等幅広く依頼を受け依頼を成功させることで依頼人から報酬を貰うことを生業として生きる何でも屋。

高町なのはの暗殺依頼請け負ったが、何者かに殺害されかけたところをイリスに救出されその後アルハザードの技術記憶転写処置を受け一命をとりとめた。

記憶をそのままに身体だけが変わってしまったが同時にレアスキルと演算能力に魔法まで使える用になったのでさほど苦労はしていない。

その際誤って過去に飛ばされてしまった。

暗殺時のコールサインはイーグルアイ。

出身はベルカ自治区の領主家の出魔力資質がなかったため追い出されてしまった。

デバイス説明：質量兵器である銃を改造しベルカ式カードリッジシステムを応用した弾を使用し魔力弾を発射する事ができる、また実弾の発射も可能。

バリアジャケット：即座に効果を発揮させるため私服に魔力を巡らせ強化するだけ。

名前：イリス・アルフォア

性別：女

年齢：8歳

魔力光：紫色

スキル：重力操作

魔力ランク：A A A （推定）

デバイス：キリシア

容姿：赤色の髪に緑色の瞳、基本的には赤色のワンピースに黒いハイスックス着用し靴は黒いブーツ

性格：困っている人を見過ごせないタイプ。

説明：代々アルハザードを管理する一族で、医療技術やデバイス等も先代から受け継いで来た、そのため非常に高い医療技術に戦闘技術を持っている。

ある日偶然死にかけたレヴィアスを助けた際、彼が誤って過去に行くことを止めようとして彼と同様過去に飛ばされた。

出身はミッドチルダ首都クラナガン、代々アルハザードの管理を行っている。

デバイス説明：大剣型のデバイス、通常ならば持ち上げられない程の重量だが、彼女のスキル重力操作のお陰で力のない彼女でも扱う事が可能になっている。

バリアジャケット：黒い西洋の鎧に赤色のマントを着用している。

鎧自体も特殊な加工がされている。

名前：ルディア・フォン・シュバルツラング

性別：女

年齢：9歳

魔力光：空色

魔力ランク：A A

デバイス：ヴェルサス

容姿：黒髪の長髪に緑色瞳、青色のワンピースに白のコートを着用し白のハイソックスをはいている、靴は白色のロングブーツを装備。

性格：おとなしく、真面目。

説明：レヴィアスが追い出されてすぐにシュバルツラング家に養女として連れてこられた少女、シュバルツラング家に養女としてきたことに誇りを感じている。

旧姓はルディア・ヴェルディ

デバイス説明：ベルカ式カードリッジシステムを搭載した剣型のル
ディア専用機。

待機状態は指輪。

バリアジャケット：レヴィアス同様私服に魔力を、流し込むだけと
なっているため、バリアジャケットの着用時間を短縮化している。

キャラクター紹介（後書き）

ここまで読んで下さった皆さまありがとうございます！

グダグダな駄文ではありますが、今後もよろしく願っています。

第2章 はじめての戦い（前書き）

第2章です。

更新が不定期ですみません、できるだけはやく投稿したいのですが、作者に文才が無さすぎて・・・。

グダグダではありますが、読んでいただければ幸いです。

第2章 はじめての戦い

なのはを家に送り届けたあと、イリスと合流するため念話を使い連絡をとった。

《あーイリス・・・こちらレイ、聞こえてるか？》

《うん！すっかりと！》

使えば使うほど、とことん魔法の便利さには驚かされる。

魔法が使えないときは連絡をとる手段として、携帯用小型無線を持ち歩いたものだ、ただどこでも連絡が取れ、便利ではあったが水に濡れたり、狭い場所に潜むとき、突撃の際に落としたりとなかなか荷物になってしまふことが度々あった。

《今更ながらだが、魔法ってスゲーな。》

《全くで、ああ、えっと宿なんだけど予約しようと思ってフロントにいったら子供だから無理だって。》

《やっぱりか・・・それじゃあ少し考えがある、少し待ってろ。》

宿の近くで、イリスと合流すると変人魔法を使い大人の姿になり宿のパソコンにハッキングし、偽名を使い 予約した。

予想通り、受付は問題なく終わった。

お金が先払いというのは予想外だったが、問題ない。

部屋は同じ部屋になった。

これも、お金の節約のためだ、収入がないので仕方がない。

「手持ちはあと、50万か……。」

「まだまだ、何とかなるね！！でも、なんでそんなに持つてるの？」

「死ぬ前に貰った依頼達成の報酬だよ、分割で通帳に入れてたんだが、3分の2入れ終わったところで依頼が、入ったから持ってたんだ、転送ポートに行く前に回収したんだがこんなところで役にたつなんてな。」

人生何があるかわからないものだ。

「でも、まあ貯金は俺が死んだことで全部ミッドチルダの公共施設費に変わったんじゃないか？」

まあ特に問題はないのだが・・・公共施設以外に使われていないか？ましてや、違法研究の資金になっていないか等様々方に思考を傾けつつ、今後の行動についても考えた。

なのはたちの援護に回っても良いが、フェイトと呼ばれていた少女の援護に回るも良し、はたまたどちらにも協力しないで傍観することもできる。

まあ、どの道に進んでもなにかしらのデメリットがあるのだがさほど大きな問題はない、あるとするならばフェイトと呼ばれていた少女の援護に回れば、やがて来るであろう管理局と敵対することになり、今後の行動に若干支障を来すことが予測される。

まあ、もともと犯罪者なので特に気にした事はない。

だが、それは1人で戦っている場合だ。

かといってこちらの使用する武器も質量兵器なので、管理局に行けば金銭面で困る事はないが、拘束される可能性が高い。

だが、このまま傍観していればやがて資金が尽きて行動等に影響が出る。

金銭面においては2人で大人の姿になって働けば問題はないので、当面の問題はないのでできる限り関与しないようにすることにした。

「と、言う訳なんで当面は何もしない方向で・・・万が一巻き込まれた場合は自分の身の危険を感じた時以外は魔法を使用しない事。」

「了解。」

「まあ、この付近一帯イリスが張ってくれたセンサーのお陰で魔導師の接近は感知出来るから心配はいらない、っと言う訳で今日は寝よう!」

布団に入るとすぐに眠りに落ちた。

次の日なぜだかわからないが速く目が覚めた。

慣れない布団だったからだろうか？

いやそんなはずはない、死ぬ前は草の上や岩の隙間等で、眠った事もある。

「・・・魔力反応？」

近くで魔力反応が出た事を知らせようとしたが、隣で眠っているはずのイリスはそこには居なかった。

「アイツどこいった？」

取り敢えず連絡を取るため念話を使った。

《今何やってんだ？》

《ごめん！今手が離せない・・・、っと！！そこから東に1000m位のところで、2名の魔導師と交戦してるから、援護御願い！》

一方的に喋り勝手に通信を切られ、おまけに援護に来いとは・・・さっそく面倒ごとに巻き込まれたようだ。

面倒くさいが一応命の恩人だ、助けてくれた人物を見捨てる事は出来ない。

「面倒くせえけど行くか・・・。」

ホルスターに収まっている、ワルサーP99の弾倉の弾と、予備弾倉の数を素早く確認し走って援護に向かった。

目の前の結界を突破し、中に入るとデバイスであろう大剣を片手に黒衣の少女と狼型の使い魔と交戦していた。

何故こうなったのか少々疑問を持ったがあとから聞こうと心に決め警告射撃のため上空にワルサーを向けて引き金を引いた。

乾いた発砲音が鳴り響き、こちらに視線が集まった。

「こんなとこで何してる？」

「チツ！！増援か！フェイトここは一度引こう！アイツ一人相手でこれだけ苦戦したんだ、それにアイツのデバイス何かおかしいんだ！」

「でも、この人はジュエルシールドの位置が特定出来るから、なんとかしても彼女だけは！」

「止めた方がいいんじゃない？」

スキルである空間転移を使用しフェイトの後頭部に銃を突き付けながらいった。

フェイトも使い魔も一瞬の出来事に驚きフリーズしていたが、すぐに理解したのかデバイスを使い反撃をしてきた。

しかし、そんな攻撃はすでに予測済みだ、攻撃してきたフェイトの右腕を掴み、顎を銃で軽く殴打し、背負い投げの要領で投げ飛ばした。

「フェイト！お前このやろっ！！」

フェイトは地面に激突する寸前に体勢を立て直し激突はまぬがれたが、顎のダメージが予想よりも大きかったらしく、今は地面に足をつけて大人しくしている。

「このおお！！」

「とりゃあ！」

向かって来た使い魔とレイの間にイリスが割り込み大剣の風圧で吹

き飛ばした。

使い魔は、交通事故にあつたかのように吹き飛ばされ地面に激突した。

「・・・お前、案外強えな・・・」

あまりの威力にあきれながらそんなことを呟いた。

「重力操作して超高速で振り抜いたことによる風圧だよ、非殺傷設定だから実際のダメージは地面に激突したダメージだけの筈だよ！」

「成る程な。」

地面をみるとフェイトが地面に激突した使い魔を心配し駆け寄って行くのが見えた。

「それじゃあ、さつさとトンズラしようぜ？管理局が来て捕まった・・・何て言うのはお話しにならないぜ？」

「了解、じゃあ結界を解くね。」

それからすぐに結界が解けた。

「んで？なんでこんな事したんだ？」

「そ・・・それは・・・。」

沈黙、先程からこればかりだ。
尋問している相手は先程迄戦っていた少女であるフェイト・テストアロッサである。

「だあかあらあ！黙ってたらかんねえってば！」

「じ……ごめんなさい。」

このやり取りもすでに5回目、先程からこの調子で全く話しが進まない。

何故こうなったかと言うと、数時間前のイリスの一言から始まった。

「ねえ、レイあの子たちかわいそうだから、宿に戻って手当てしてあげようよ。」

「まあ、いいだろう、聞きたいこともあるし。」

そして抵抗する2人を黙らせ、宿で手当てをした。
そして話を聞こうと呼び出し現在に至る。

「はあ……まあ気楽にしてくれよ、何も取って食おう何て思っていないからさ、それに俺達は管理局員じゃない。」

今までよりも優しく言うと言つと口を開いてくれた。

「も……目的は……母さんが集めて来なさいって……私がジュエルシードを全部集めて来たらきつと母さんは喜んでくれる、そうすればきつと母さんは昔みたいに笑ってくれる、私は昔みたいに母さんが笑ってくれればいいんだ、それが私達の目的。」

「そうか、母さんのためか……でも、一応これって犯罪だぜ？俺が言うのも何だけど今ならまだ管理局が関与していない、引くなら今

しかないそれに管理局が介入して来たら、君達は身動きが取りづらくなるし回収効率も悪くなる。」

かつて自分が経験したのでよくわかる、管理局のしつこさと探索能力の高さ、それを知っているためフェイトには身を引く事を進めた。

「引いて戻ったところで、フェイトはアイツに酷いことされるんだ。」

「アルフ、もう平気なの？」

足取りはまだダメージが残っているせいか、どこかおぼつかない状態だった。

そしてフェイトの横に座ると憎しみの籠った声で話しはじめた。

「アイツ・プレシアはフェイトにいつも酷いことするんだ、フェイトはいつもアイツのためってがんばってるけど……。」

「アルフ、母さんを悪く言わないで私が上手く出来ないからいけないんだよ。」

イリスから聞いた話しでは、フェイトの身体中には先程の戦闘以外の傷があった事から何があったのかは、先程の会話である程度予測がついた。

「家庭の事情ってやつか、まあいいけどさあんま派手なことしないようにな？次元震なんか起こすものならあつという間に管理局が介入して来るからな。」

「レイ、ごめん少しいいかな？」

イリスに呼ばれ耳を貸すと、どうやら近くにジュエルシードが落ちていたようだ。

「了解。」

そう言うとフェイト達がいる部屋戻ったがそこには2人の姿はなく開けっ放しの窓と若干の魔力使用の痕跡があるだけだった。

第2章 はじめての戦い（後書き）

ここまで読んで頂きありがとうございます！

引き継ぎ頑張りますので、よろしくお願いいたします。
次回からは出来るだけ早く投稿出来るように努力します。

第3章 管理局の介入（前書き）

第3章です。

グダグダですが、引き続き頑張つて更新して行きますのでよろしく
お願いいたします。

第3章 管理局の介入

どうやら先程のイリスとの会話を何らかの方法で聞き、窓から飛んで行ったようだ。

「ミスったな念話使うべきだった。」

「ごめん……。」「

「悔いても仕方がない、ジュエルシードの回収に向かおう。」

急いで準備をし、ジュエルシードのあるポイントに急いだ。

現場についた時にはすでに、高町なのはと睨みあい一触即発の状態だった。

「喧嘩は良くないぞ？」

「えっ？」

レイの声に反応したなのはが一瞬氣をとられた時フェイトが動いた、しかしなのはも応戦するためすぐに動いたがデバイス同士が当たる前に中間に入ってきた何者かにバインドを掛けられ動きを止められた。

「時空管理局、執務官のクロノ・ハラオウンだ、全員武装を解除して貰う。」

「げっ！面倒くせえよりもよって局員かよ？」

「逃げるが勝ちかな？」

イリスの提案を即座に適用し、局員に攻撃しているアルフト、ジュエルシードに向かって走りはじめたフェイトを確保し、その場から逃げた。

「ああ、折角今度は犯罪者にはならないって思ってたのに、なんでこうなるんだあ！」

「あなたは、お人好しが原因で身を滅ぼすタイプだね！」

「全くもって反論ができません・・・それはさておき、管理局出てきたけどどーすんの？」

管理局が出てきた以上これからのジュエルシード探しは困難になる。そのため効率や移動制限などの様々制約をつけることになる。

「それでも私達は探します。」

「そうか、それじゃあ俺達もできる限り支援しよう。」

「えっ！？なんで？」

そう言うのと、驚いた表情のフェイトが聞いて来た。

「成り行きとはいえ、管理局側から見たら俺達は君達の逃走を支援した、だから俺達も犯罪者扱いになるんだ。」

「まあ質量兵器持つてる時点で犯罪者なんだしね？」

「そうなんだよなあ・・・誰かデバイス作成できる奴は？」

回りを見渡すとイリスが自信なさげに手を挙げていた。

「道具と設計図があれば作れるけど？」

「設計図ほどではないが、大体の形は決まってる・・・これとこれを盛り込んでほしい。」

見せたのは愛銃のワルサーP99とM82A1だ。

「なるほど・・・あとは道具だね。」

「道具かあ・・・そうなんだよなあ。」

「あの、もしかしたら母さんのいる時の庭園なら道具があるかも・・・」

フェイトがそう言うとは意外だった。
時の庭園と言ったときアルフの顔が一瞬陰つたのには大体想像がつく。

「道案内頼めるか？」

「わかった。」

そして足下に円形の魔方陣が展開され、フェイトが座標を言い終えると、その場にいた全員は時の庭園に飛ばされた。

「着いたよ。」

「そうか、それじゃ案内たのむ」

そして案内された場所には素人の目で見てわかるぐらい設備が整っていた。

「わぁこれだけあればデバイスはすぐにできるよ!」

「そうか、じゃあ頼む。」

その言葉が届いているかわからないが、ものすごい速度と技術でワルサーP99とM82A1が改造されていく。ものの2時間足らずで、デバイスが完成した。

基本フレームは双方とも原型をとめているが、大きく異なっているのは、M82A1は起動させるまではプレスレット状になっているのに対しワルサーP99はすぐに抜き打ちが出来るよう銃そのものの形となっている。

どちらもベルカ式カードリッジシステムを採用しているため弾倉のリロードが必用である。

ワルサーに関してはカードリッジ1発につき魔力弾が1発のみだが、M82A1に関しては収束砲、誘導弾、多重弾殻射撃等も可能である。

「スゲーな。」

「もちろん弾倉を変えれば、今まで通り実弾も撃てるよ。」

一通りの説明を受け、デバイスを受け取った。

取り敢えず作業が終わったのでフェイトを探した、あらかじめアルフに教えてもらった場所に行くところ扉の前で座っていた。

「ん？どうした？フェイトは一緒じゃないのか？」

アルフは何も言わず扉の方を指さした。

そちらに目を向けると、中からは鞭のようなもので叩かれている音とそれに合わせ悲鳴のような声が聞こえてくる。

「イリス……。」

「他所の家庭に首を突っ込むのはあんまり良くないと思うけど、見なかったことにする。」

そこで気配を消し空間転移を使用し、音もなく中に侵入すると、M82A1を起動させた。

プレシアはフェイトの方に集中しているのかこちらには気付いていないようだった。

そこでスコープを覗き込み照準を合わせた。

照準が完全に合った事を確認すると、引き金をゆっくり引いた。

すると驚いたことに、反動はあったもののいつもであればなるはずの音がなかった。

驚きながらも成果確認をした。

多重弾殻魔力弾は数センチのズレはあったもののしっかりとプレシアの振り上げた腕に直撃した。

そこでやっと人がいることに気づいたようだった。
雷撃が飛んできたが右に転がる事で回避した。

「あぶね！」

ものすごい威力だった。

あたっていたらただではすまなかっただろう。

「アナタどうやってここに・・・。」

「あゝこりゃ酷でえな。」

驚いているプレシアを無視し両腕を吊るされているフェイトを下ろした。

「大丈夫か？今治療してやる」

「どこの誰かは知らないけど、邪魔しないでくれる？」

「いや、そう言う訳にはいかないんだよなあ見ちまったからさ、こ
んなの虐待だろ？」

「いいえ、その子が私の望みの物を持って来ないからお仕置きをし
てるだけよ。」

そこで、なんのためにこんな事をしているのか聞いて見ることにし
た。

「なんで、そこまでしてジュエルシードを求めているんだ？」

さっきの雷撃音を不思議に思ったアルフとイリスが中に入って来た。そしてすぐに床に寝かされているフェイトに気づき、治療をはじめた。

「酷い……。」

「なんでアンタはこんな事が出来るんだ！フェイトはあアンタの娘だろ！？」

「アルフ、殴りたい気持ちはわかるが、今は大人しくしてくれ。」

そう言うと、全員まとめて空間転移を使用し海鳴市に移動した。

「一難去ったな。」

「全員武装を解除して投降しろ！」

「一難去ってまた一難か……。」

そう、呟くとイリスとアルフには合図で目と耳を塞いでから逃げるよう指示した。

「ハイハイ、わかりましたよっと。」

武装を解除するふりをしてクロノとか言う執務官の足下にスタングレネードを投げた。

「いまだ！」

そのこえで管理局員以外の人間は目と耳を塞いだ。

次の瞬間スタングレネードは破裂し、約100万カンテラの閃光と、約180デシベルの音が鳴り響いた。

当然それを直視したクロノは気絶し、その他の局員も気絶するか、あまりの閃光に目を抑えている。

その隙に、イリスとアルフの転送魔法で逃げた。

第3章 管理局の介入（後書き）

ここまでグダグダな作品を読んで頂きありがとうございます！

引き続き頑張りますので、よろしく願いいたします。

第4章 つかの間の休日？（前書き）

第4章です。

なんとか投稿出来ました。

グダグダですが読んで頂ければ幸いです。

第4章 つかの間の休日？

前日管理員達から逃げて一晩が経過した。

未だに管理はこちらの潜伏場所を特定出来ない。

「ジュエルシードの封印任せた。」

「了解。」

元気に返事をするイリスだが、さすがに疲れの色が伺える。

「よし、サンキュー次は何処なんだ？」

「あとは全部海の中にあるね。」

「わかった、今日はこれぐらいにしておこう。」

そう言いつと、フェイト達の居る隠れ家に戻った。

比較的広い部屋のため2人入ったところでたいした問題はない。

「昨日の夜から今までで合計2つだ、アルフ、フェイトの調子はどうなんだ？」

「ああ、イリスのお陰でかなり良くなってるよ。」

「残りのジュエルシードは全部海の中、管理局の奴等が見つけるまで、結構かかるだろうから暫くは休憩だ、町でゆっくりしてこい。」

そう言いつと、イリスとフェイトは一緒に買い物に行った。

「そう言えば、イリスから聞いたんだけどアンタの名前は偽名なん
だろ？」

「まあな、仕事柄本名で動くのは危険だからな。」

「本名は何て言うんだい？」

少し黙り口を開いた。

「レヴィアス・フォン・シュバルツラング、親父はライナス・フォン・シュバルツラングだ。」

「シュバルツラングって言えば、たしかミッドチルダのベルカ自治
区の領主家じゃないか！？そんな奴がなんでこんな事してるんだい
？」

「まあもともと俺には魔力資質がなくてな、それを知った親父は俺
が9歳の時に屋敷から追い出されて今に至ると言うわけだ。」

所々かなりはしょったがまあ、これだけ話せば充分だろう。

案の定沈黙が訪れた。

取り敢えず現状を打破するためテレビをつけた。

するとんでもない事に、イリスとフェイトの向かったショッピン
グセンターに銃を所持した武装集団が占拠しているというニュース
がやっていた。

思わずリモコンを落としてしまったが、取り敢えずやるべき事はた
だ1つのみだ。

急いで準備をし、現場に向かった。

現場には警察をはじめ、軍人のような者もいた。既にバリケードや包囲の手筈はすんでいるようだ。

敵は話を聞く限り10名ほど、武装はAK-47アサルトライフルに手榴弾、それに中にいるイリスとフェイトに聞いたところ、一TNT（爆弾）など持ち込んでいるらしい。

とにかく屋上で見張っている人間を叩くべく別のビルの屋上からM82A1を使い狙撃することにした。

実際確認して見ると屋上の見張りは1人しかいなかったため、何のためらいもなく照準を合わせ引き金を引いた。

その弾丸はまっすぐぶれる事なく見張りの頭部に直撃した・・・もちろん非殺傷設定でだ。

倒したことを確認しビルの屋上に転移した。

そこからはM82A1を仕舞いワルサーP99を引き抜き、警戒しながら内部に侵入した。

屋上から続く階段を音を建てないようにゆっくり降りた。

暫く歩いて行くと銃をもった2人組の男がこちらに歩いて来るのが見えた。

「屋上の奴がやられたらしぜ？」

「しょうがねえってアイツは間抜けだからな。」

そんなことを話ながらこちらに歩いて来る。
そこで、スタングレネードを投げ込んだ。

男たちは足下落ちたものにとっさに銃を向けていたが、それは逆効果だと気が付いた時には2人揃って気絶していた。

「お前たちも間抜けだな。」

苦笑いしながらそう言うと、奥に進んで行った。

倒した犯人の数は3人あと残りは7人である。

もしかしたらそれ以上いる可能性もあるので警戒を怠る訳にはいかない。

「えっと、人質のいるフロアが5階だったな・・・おっと！」

角を曲がると直ぐに隠れた。

「今何人やられた？」

「はい、現在何者かの襲撃で屋上に配置した1名と、巡回させていた2名と連絡がつかません。」

「そうか、では目的地は人質の解放の筈だ5階以外の場所を封鎖しろ、それから念のため5階もくまなく探せ。」

「了解！」

するとシャッターが閉まった。

そして、人質の見張りを残し残りの全員は搜索に出た。

人質回りに敵が少なくなったのは幸いだ。
そこで先に見張りを倒すことにした。

人質を盾にされないよう細心の注意を払い撃った。
弾丸はまっすぐ飛んでいき数センチのズレはあるものの、しっかりと相手の頭部をとらえた。
当たった相手はそのまま気絶した。

突然見張りが倒れたので、人質となっていた人達は驚いていたがそんなことは気にせずと言った。

「イリス、フエイト大丈夫か？」

「私達は大丈夫、先に他の人達を。」

「わかった、でも5階は今閉鎖されてるからもう少し待ってくれ。」

そう言うとイリスにM82A1を渡し簡単なバリケードを作り、別フロアにある警備室に向かった。

そこには犯人が警備員を人質にとり色々な操作をさせていた。

そこで背後から近付き犯人をホールドアップした。
そして、頭を撃ち気絶させ警備員を助けるとすべてのフロアのシャッターを解放し裏口から警備員を逃げさせた。

「あとは上の人質を解放するだけか。」

警備員室を後にし、再度5階の人質達の元に戻った。

犯人達は今頃5階の至るところに散らばっているため、逃がすのは容易だった。

全員逃がし終え後は警察の仕事だ自身は人質に紛れ退散するだけだったが、誰かがマスコミに存在を知らせたらしく、取材陣がよって来た。

「おいおい、誰だ？マスコミに教えたの。」

マスコミの後ろには警察の姿もある、まあ銃撃戦をしたのだ、この世界で言うところの銃刀法違反と言ったものに違反するからだろう。

ともかくここにとどまるのは得策ではない、そう判断しイリスとフエイトを連れて逃げた。

その様子は一部放送されていたが、後ろ姿だけだったし、その後直ぐに警察等が突入し犯人を逮捕している映像に移り変わったのてまたいした問題はないだろう。

そんなことをテレビを見ながら考えていた。

第4章 つかの間の休日？（後書き）

ここまで読んで下さった皆様ありがとうございました！

引き続き頑張りますのでよろしくお願いいたします。

第5章 決戦前（前書き）

第5章です。

グダグダですが読んでいただければ幸いです。

第5章 決戦前

先日の立て籠り事件のせいで余り休む事が出来なかったが、そろそろ管理局も残りのジュエルシードの位置が海の中だと言う事に気が付き始めているだろう。

これまでは後手後手に回っていた管理局もさすがに6つは渡す訳にはいけないので、血眼になって位置の特定をしているに違いない。

「さてさて、そろそろ行きますか！」

「うん！」

全回復したフェイトも意気揚々としている。

全員の準備が終わるのを確認し、ポイントに移動した。

ポイントに着くと当初の作戦通りフェイトが儀式魔法を展開した。

今頃管理局員達は大慌てだろう。

そう考えると、何だか自然と笑みがこぼれた。

「管理局は多分恐らく俺達だけで全部封印出来ないと踏んで傍観の姿勢をとるはず、だから俺達はそれを逆手にとって全部封印してやるんだ。」

「もし出来なかったら？」

「全滅して全員まとめて管理局に御用になる事になるだけだ。」

そんなことをイリスと話していると、フェイトの儀式魔法が発動し、雷が海面に落ちた。

「フェイトに魔力分けてやれ、俺はデカイやつの準備をする。」

「はい。」

そう指示すると、M82A1をとりだし魔力チャージを開始した。3分の2程チャージが終わった時だった、背後から結界内への侵入を確認した。

「誰だ？局員か？」

「違う、高町なのはちゃんだね。」

「なんで今さら？まあ、囑託魔導師になってるから管理局員と同じだ、迎撃しろ。」

イリスは頷き大剣を片手に高町なのはの迎撃に向かった。

《発射まで後30秒・・・20秒・・・10秒・・・54321発射！》

「グラウンドゼロ！」

引き金を引くとで今まで収束していた魔力を一気に撃ちはなった。

そして海面に着弾すると大爆発を起こした、それに加え、なのはのデバインバスターも加わり余計に爆発は大きくなった。

余波が収まると海面には6つのジュエルシードが浮いていた。

その奥ではフェイトとなのはがなにかを話していたが、良く聞こえなかった。

「イリス封印頼む。」

「任せて。」

イリスがジュエルシードに向かって行くと、途中クロノが割って入って来た。

そしてフェイトに目掛け上空から雷撃が落ちた。

その混乱の隙にクロノを叩き落としジュエルシードを回収しようとしたが、クロノはタダでは転ばないタイプのようなのだ。

イリスに叩き落とされる直前にジュエルシード3つを掴んで行った。

咄嗟に銃を向けたが、間に合わず回収されてしまった。

「チツ！あのクソ野郎！邪魔しやがって。」

頭に血が登りかけたが直ぐに目的を思いだし、やるべき事をするため、フェイトの方に向かった。

「ねえ！フェイトちゃん大丈夫だよね！？」

「安心しろ高町なのは、フェイトは大丈夫こっちは優秀な医者がいるからな。」

そう言うところとちょうどジュエルシードを回収したイリスが戻ってきた。

「よし、逃げるぞ！集まれ！」

そう叫び全員が集まったのを確認し、空間転移した。

隠れ家に着くとイリスが治療した。

実際そこまでのダメージではなく、火傷程度だったため直ぐに治療は終わった。

次の日なんではわからないがフェイトとアルフの姿が見えなかった。

「イリス、どこに行ったか聞いてるか？」

「聞いてないよ？」

何だか嫌な予感がした。

恐らく、フェイト達はプレシアの元に向かったに違いない。行こうにも座標を知らないのでもうしょうもない。

「ただ無事を祈るだけか・・・」

もちろん無事な筈はないが、最悪殺されていなければいいが・・・

その日の夕方、警戒していたイリスがアルフのものらしき魔力反応を見つけたらしく、一緒に現場に向かった。

「これは・・・」

そこにはそれなりの量の血痕があるだけだった。

良く見ると血痕は道路の方に続いており、そこからは車に乗ったのか血痕が途切れていた。

車の走って行った方向は分かるが、そこから先はわからなかった。

アルフのとも何度が連絡を取ろうと試みて見たものの、気絶しているか死んでいるかどうかはわからないが応答はなかった。

「今日は遅いから、搜索は終わりだ。」

「アルフ大丈夫かな？」

「アイツは簡単にくたばらないさ。」

取り敢えず隠れ家に戻ると傷だらけのフェイトがソファに横になっていた。

物音に気が付いたのかフェイトは目を覚ました。

「また、時の庭園に行ったな？」

「ご免なさい、母さんに報告した方がいいと思って・・・。」

「あんなに行くなって言ったのに・・・まあすんだ事だから仕方がない、俺は何も言わない。」

イリスとアイコンタクトすると一瞬で理解しフェイトの治療を始めた。

その後は特に何もなく平和に終わった。

次の日の早朝もアルフの搜索に出た、しかし見つからないため、お

昼頃休憩し昼からも搜索を継続したが、暗くなるまで探したが見つからなかった。

「全く、これなら昔やってた猫探しの方が楽だった・・・」

昔請け負った猫探しは簡単だった、猫の行きそうな場所をしらみつぶしに探した結果ほんの2時間弱で発見、報酬を貰ったものだ。

だが、今回は訳が違うタダの狼ではない上に知能も人間並みの使い魔だ、犬が行きそうな場所を探しても見つかる筈がない。

若干諦めかけていたが、突然アルフから連絡が入った。

《アルフか？》

《はじめまして・・・って言うのはおかしいかな？

あの私高町・・・》

《高町なのはだろ？知ってるよ・・・んで？単刀直入に聞く、なんでアルフ用の通信回線を使ってる？それから用件はなんだ？》

明らかに向こうは戸惑っているだろうが直ぐに解答が返ってきた。

《えっと、実は明日フェイトちゃんとジュエルシードを全部掛けて勝負したいんだ、フェイトちゃんに連絡を取ったんだけど、直ぐに切られちゃって。》

《それで俺に連絡して来たのか？》

《うん、あっ！アルフさんは元気で今こっちにいるから安心してね

！それじゃ！》

一方的に、喋って切られた。

一応フェイトにも相談はするつもりだ。

「まあ、どう転ぶかはわからないが・・相談するか。」

「フェイトちゃんにはすでに報告済みだよ、ヤル気満々みたい。」

「ジュエルシードがかかっているんだ無理もない。」

そう言うて来た道を戻りフェイトの隠れ家に向かった。

「ただいま？」

「ただいまー、フェイト居る？」

「うん、居るよ。」

そう言うてフェイトが扉からひょっこり顔を出した。

きつとさっきまで1人で傷の手当てをしていたのか、腕や足などに無造作に包帯が巻かれていた。

「また、手酷くやられたみたいだな。」

「うん、でもジュエルシードが集まれば昔みたいに母さんと笑って暮らせる様になるんだ、だから今回の管理局の白い魔導師との勝負を受けたんだから。」

「そうか勝ってまた仲良く暮らせるといいな。」

そう言うフェイトの顔はとても明るかった。

その後イリスがフェイトの怪我を治し戦闘に備えさせるため早めに休ませた。

第5章 決戦前（後書き）

ここまで読んで下さった皆様ありがとうございます！

引き続き頑張りますのでよろしくお願いいたします。

感想等ありましたら、お気軽にお願いいたします。

第6章 決戦（前書き）

大変遅くなりました、第6章です。

投稿が遅くなりましたすみません。
相変わらずグダグダですが読んでいただければ幸いです。

第6章 決戦

そして決戦の日がやってきた。

フェイトは前日から愛機のチェックに勤しんでいる。

「調子はどうだ？」

「イリスが治療してくれたお陰で絶好調だよ、でもイリスは何処であんな治療の方法を学んだの？基礎の構築も何だか違ったし。」

「そりゃあ、あれだアイツの生まれた家のせいだな。」

彼女は代々アルハザードの管理する立場なのだから一般の人が知らない魔法を知っていてもなんら不思議は無い。

そもそもアルハザードなんてものは最早昔話の領域であるかどうかすらも怪しいほど廃れてしまっている、実際に行ってみるまでは無いと思い込んでいたが、実際に行っているのだなともいえない。また、イリスにも口止めされているので説明したくてもできない。

「そうなんだ、どこか優秀な医者の家系なんだね。」

「まあそんなところだ。」

実際はまったく違うのだが説明できない以上合わせておいた方が得策だろう。

そして決戦の時間が近づき決戦の現場に向かった。

フェイトをなのはの近くに降ろし観客席とは程遠いがアルフの立っているビルの上に陣取った。

「よう、アルフ元気そうで何よりだ。」

「ああ、悪かったね鬼婆の攻撃を喰らわなきゃこんな事にはならなかったんだけど。」

「アルフ気にしないで、フェイトのためだもん仕方ないよ。」

イリスがそういうと妙な視線を感じそちらに顔を向けた。
そこにはいつもなのはと一緒にいるフェレットがいた。

「そこのフェレットもどき、俺に何か用か？」

「君少し前の立てこもり事件の現場にいたよね？」

「ああ、人質解放の手伝いをしただけだが・・・どうかしたか？」

「何で、あんな・・・もしかしたら管理局員がテレビを見てるかもしれないのに大胆な行動を取ったのかなって思ってた。」

どうやらこのフェレットもどきあのとときの放送を見ていたようだ、ニュースでは逃げる場面しか映っていなかったようだ、このフェレットもどきどうやら現場近くに居て姿を目撃したらしい。

「そんなのは簡単なことだ、人質の中に助けないといけない人間が居たからだ、他の人間はあくまでついてだ・・・さて始まったか。」

その事に対し何か言おうとしていたフェレットもどきも戦闘を見る事に集中していたが俺はゆっくり見るつもりは無い。

次のヤツの行動に対するできうる全ての手を封じるため様々な工作をしたがそれも全て完全ではない、そのためいつでも動けるよう装

備のチェックを始めた。

「何をやってるんだ？」

「見てわかんねえか？フェレットもどき？手入れだよ手入れ、これから何が起こるかわかんねえから即対処できるように予め装備の確認と銃の不具合とか確認しておくのが戦場の基本だろ？いざって時に故障して使えません、じゃあ話にならないからな。」

「フェレットもどきじゃなくて、僕はユーノ・スクライアって言う名前が・・・！」

「はいはい、ホラ俺の方はいいから戦いに集中しときな。」

2人ともかなりいい勝負をしている。

だがやはりなのは実戦経験がフェイトに比べ少ないので全体的にフェイトが優勢だ。

若干なのは魔法の消し方が雑なのは気になるが経験不足だろう。

「おっ！ライトニングバインドで捕まえたねこれはフェイトの勝ちかな？」

「フェイトの勝ちだけど・・・。」

向こうではフェイトがフォトンランサー・フランクスシフトを派手に撃ち、最後のトドメを打ち込んでいた。

ものすごい爆風が吹き荒れこちらまで余波が来たがそこまで大きな余波ではなかった。

「おっ！スゲエ防御硬いな、まだ飛んでるよ。」

あれだけ攻撃を受けて無事に飛んでいるのはには脱帽だ。

フェイトも流石に驚いているようだが、直ぐに切り替えたのかまたクロスレンジに持ち込もうとしていたその進行方向にバインドが設置されているのに気付かずに。

案の定バインドに固定されてしまっている、幸い左手だけは縛られていないようだが魔力の残り少ないフェイトにはあの砲撃は厳しいだろう、それになのははまだ決め手を持っている俺はそう確信していた。

その後動けないフェイトに目掛けディバインバスターが発射されたが、何とか防ぎきっていたフェイトはそれを終わりだと思ったのか、油断しきっているが終わりではない事を思い知らせるかのように魔力の塵が上空に集まっていくのを確認し上を見上げた。

「収束砲？」

上空には巨大な魔力の塊が形成されていた。

「おい！巻き込まれなくなかったらさっさと離れる！」

「えっ？」

あの大きさからして間違いなく攻撃は観戦しているビルまで吹き飛ばす威力があるだろう。

フェイトのトドメであれだけの衝撃波なのだから、間違いなく被害はそれ以上になるだろう。

全員まとめて遠くまで転移した。

直後なのは全力のスターライトブレイカーが放たれフェイトはもちろん、先程まで全員が居た場所も見事消滅している。

あのなのはこの少女一見大人しく礼儀正しく見えるが内面はどうやらそうではないらしい。

フェイトは無事だろうか？

俺はふと思いだし少女の姿を探した。

しかしどこにも見当たらないが、なのはが今海の中に飛び込んだところを見ると恐らくあそこに墜落したのだろう。

救出は彼女に任せるとしよう。

なのでこちらは管理局に対して警戒することにする。

アルフとイリスとフェレットもどきは急いでフェイトの元に向かって行ったが俺はゆっくり警戒しながら降りた。

「フェイトは大丈夫か？」

「まだ意識は無いけど、大丈夫直ぐに・・・目が覚めたみたいだよ。」

「・・・ん・・・アルフ？イリス？」

「ああ大丈夫かい？」

「さてさて、さっさとこっから離れよう管理局に連れていかれる前にさ。」

そう言うとバインドで拘束された、実際上手くないものだつくづくそう思った。

「ああ射撃魔法ばかり勉強するんじゃないくて、バインドの解除の仕方勉強しとけばよかった。」

「さて、大人しくしてもらう、いくつか聞きたい事があるから・・・」

そのとき上空が暗くなった。

雷も所々に見え始めて来た何だか嫌な予感がした時だった、狙いは上空に停滞している管理局執務官か、フェイトだろう。

取り敢えず強引にバインドを破ると、管理局執務官を射線と推定される場所から蹴飛ばし直ぐにフェイトを突飛ばした。

その後、フェイトの居た場所に雷撃が落ちたと同時にデバイスに改造したM82A1オートガードが発動したもののあつという間に破壊され衝撃が身体に走り意識を失った。

第6章 決戦（後書き）

ここまで読んで下さった皆様ありがとうございます！
引き続き頑張って投稿していきます。

第7章 終結（前書き）

第7章です。

相変わらずのグダグダではありますが、読んで頂けるなら幸いです。

第7章 終結

不意に目が覚めた、いったいどれぐらいの時間意識を失ってどれぐらいたったんだろうか？

回りを見渡すと普段一緒にて真っ先に治してくれる筈のイリスの姿が見えなかった。

その代わりモニターが煌々と光っていた。

部屋が暗いせいか眩しいくらいだ。

「痛えな・・・。」

身体中火傷と軽度の打撲それに加え両腕につけられた手錠だ。

「全く、怪我人にここまでするかよ？普通。」

そんなことを呟くと、近くにあったモニターを破壊し中からできるだけノコギリ状の基盤をとりだしそれに魔力を加え強度を上げ手錠を切り落とすことにした。

かなり時間を食ってしまったが、何とか切り落とすことに成功しデバイスを探すことにした。

「魔法ってやっぱり便利だな・・・普通ならもっと時間がかかるしな。」

取り敢えず部屋をでた。

しかし、様子がおかしい、必ずいるはずの見張りも警備もない。

「こりゃあどうなってんだ？」

とにかく、デバイスを探すことにした。

廊下を警戒しながら歩いていったがほとんど出払っているのか、全く
局員と出会わなかった。

「デバイス研究室・・・ここはありそうだな。」

部屋に入ると研究者らしき人物が1人ワルサーの分解を研究していた。
た。

「動くな。」

近くに引っかけてあったM82A1を取ると機動させ研究者の頭に
突き付けた。

研究者は指示に従わずなにかを取ろうとしたので引き金を引き魔力
弾を撃った。

研究者はそのまま床に倒れた。

そして分解されていたワルサーP99を組み立て装備品をすべて回
収しその部屋をでた。

すると誰かがこちらに歩いて来た。

俺は向かいの部屋に隠れた。

その人物は部屋を通りすぎ先程まで寝かされていた部屋の方に歩いて
いった。

気配がなくなつた事を確認して部屋から出た。

「行っただか・・・」

「やっぱりそこに居たのね。」

「迂闊だったか。」

そこには明らかに普通の局員とは違う局員が立っていた。

「私はこの艦の艦長リンディ・ハラOWNです、アナタの本名は？」

「レヴィアス・フォン・シュバルツラングが本名だが用件は何だ？」

「ええ、実は貴方と取り引きをしたいんですけど？」

「取り引きか、話は聞いてやる。」

そう言うのと応接室に通された。

そこにあつた椅子に座るとリンディが話を始めた。

「んで？取り引きって？」

「そうね、単刀直入に言うわね？貴方がプレシアの逮捕に協力してそのあと管理局の嘱託魔導師試験を受ける事、その条件を受けてもらえるなら、貴方とイリスさんの事については民間協力者として報告します。」

「従わない場合は、この場で拘束って事か・・・わかった良いだろう、その条件を受けるよう、ただし俺のことは偽名で登録を頼む後からややこしい事になりたくなかったらな。」

「わかったわ、その条件を受け入れます。」

「じゃあ、これで心置き無くプレシアを撃てる訳だ。」

そう言い残し、庭園に向かった。

オペレーターから聞いた話ではすでにクロノ、なのは、ユーノ、イリスが突入そして先程アルフも突入したとの事だ。

《了解、フェイトは参加していないのか？》

《え？あ・・・うん、フェイトちゃんは休んでもらってる。》

《そうか、そちらの方がいいだろう・・・まずは奴等と合流する。》

《

そう言うと前方で入口を塞いでいる傀儡兵をM82A1で撃ち倒しながら先に進んだ。

「よう、元気か？イリス？」

「レヴィアス！もう大丈夫なの？」

「もちろんだ・・・さてちゃっちゃんと片付けちまおうぜ？」

「うん！」

「高町とフェレットもどきも手伝え。」

フェレットもどきは何だかギャーギャー言ってるさいが無視した。

「あゝ身体中痛えな・・・。」

「レヴィアス君危ない!!」

完全に油断していたためか、はたまた痛みのせいかわからないが反応が遅れた。

目の前に傀儡兵の斧が降り下ろされているのがみえる。

・・・死んだ・・・。

完全に逃げるタイミングを見失い2回目の死を覚悟した・・・が斧が当たる事はなかった。

なぜなら、飛来した雷と間一髪間に合ったイリスの大剣キリシアが斧を弾き飛ばしたからだ。

「あ・・・悪い、助かった。」

「やっぱり、大丈夫じゃないじゃない。」

「気にするな、大丈夫ちよつと油断しただけだ。」

そう言う俺は治療もそこにフェイトの方に向かった。

「おまえ、休んでるんじゃないのか？」

「うん、大丈夫私は戦える。」

何だか良くわからないが、本人が大丈夫というなら間違いはないだろう。

大きな傷も損傷も無いようなのでそれ以上は何も言わなかった。

そこで2手に別れる事にした。

一方はフェイトと一緒にプレシアの逮捕に向かうメンバーともう一方は駆動炉の封印に行くメンバーだ。

「個人的に俺はプレシアを殴りたいんだが？」

「

「でも、プレシアの目的は娘アリシアの復活だから、私がプレシアの所に行くよ！」

「わかった、後から俺達もそっちに向かうから、先に行け！俺と高町、ユーノは駆動炉の封印だ・・・気楽に行こうぜ？ずつと張り切つてると疲れるだろ？俺が周囲警戒しとくから気を緩めて歩いて良いぜ？」

そう言うとなのはは少し気楽になったのか、顔に笑顔が戻った。

「はい！」

「あと、俺は多分おまえと同年だから敬語じゃなくていいぞ？」

「君本当に9歳なのかい？とてもそうには見えないけど。」

「気にするな、あんまり気にし過ぎると早死にするぜ？そうだな、強いて言えばお前とは比べ物にならないぐらいの実戦経験を持つてゐるって事だ・・・さて立ち話はここまでだ盛大なお出迎えだぞ？」

そこにはこれでもか・・・と言う程の傀儡兵が居た。

射撃型のや斧を持つてるヤツとにかく沢山の傀儡兵が居た。

「さて、やりますか！みなさん？」

「もちろん！」

俺の問いかけに勇ましい返答を返してくれた。

この場で余り大きな魔法は使えないので、一撃必殺の精密射撃をすることにする。

M82A1の引き金を引くたびに傀儡兵は一体また一体と倒れていく。

「おっと！」

気付かないうちに近付かれていた傀儡兵の攻撃を避けながら近付き、脳天からゼロ距離でぶち抜いた。

それと同時に弾切れをのためスライドが開いたが即座に空弾倉を抜き取り、予備弾倉に入れ替えた。

なのは達も必死で戦っている、もうすぐこの場所の制圧は完了する。後は駆動炉の封印をするだけだ。

「片付いたか・・・」
「たたくM82用のカードリッジ特注だから高いんだぞ・・・。」

取り敢えずすべてが片付いたらプレシアに請求するでしょう。

そう心に決めて駆動炉を、後にしプレシアの居る場所を目指した。

プレシアの居る場所にたどり着くとプレシアはフェイトに良く似た・
・いや本人を抱きしめ歓喜に浸っていたがフェイトはどこか悲し
そうな顔をしている。

「もういいわ・・・フェイト・・・アリシアが私の元に戻った以上
貴女はもう必用ないわ、さあ！今すぐこの場から消え去りなさい！」

「なっ！話が・・・違うじゃない！アリシアを生き返らしたら、フ
ェイトもちやんと娘として迎えるって約束はどうしたの！？」

「本当に貴女には感謝してるわ？わざわざありがとう、後はその失
敗作と一緒に御帰宅願えるかしら？」

その会話を聞いて血管が切れるような音がしたかと思うと、身体が
勝手に走り出しプレシアを殴り飛ばしアリシアのこめかみにワルサ
ー（ゴム弾）を突き付けた。

「やだ！ママ！助けて！」

「動くな！プレシア・テストロッサ、動けばアリシアの命は無い・
・俺は2回も同じことは言わない。」

腕の中で暴れるアリシアを逃がさない様になつちりホールドし直し
て、口を開いた。

「お前は人の命をなんだと思ってたんだ！アリシアだろうがフェイト
だろうが今を生きてる事には変わらないだろ！？」

俺は目の前に居るプレシアに言ったがプレシアに効果があるとは思

ってない。

「いいえ、フェイトは私のアリシアがいない間慰めに使うお人形、そんなにあのお人形が可愛いならあげるわ、処分に困ってたから・・・よかったわね？フェイト、この人が貴女みたいな使えない人形さんでも貰ってくれるそうよ。」

フェイトがまた泣きそうになっているのをプレシアは笑って見ていた、それを見た俺は思わず思った事を口にした。

「この屑野郎！」

アリシアを横に突飛ばし、弾倉をカードリッジに交換し、プレシアを撃った、もちろん非殺傷だ。

魔力ダメージによる気絶により動かなくなった。

「ママ！！この人殺し！！！」

「母さん！！！」

アリシアが俺をポカポカ殴ってきたが関係ない、はのはに頼んでプレシアに嚴重にバインドを掛けアースラに運んだ。

アリシアにも死んでいないことを説明したが、何故かこちらをずっと睨んでいる。

「はあ・・・何時まで睨んでいるつもりだ？ずっと睨んでいるつもりならその目を撃ち抜くぞ？」

簡単な脅しを掛けて見たが全く効果なしの様だ。

「なあフェイト、元気出せよ？確かに親に捨てられた時のショックはわかるけど前向きにならないと、事態はドンドン悪化してくぜ？」

「貴方なんかにはこの気持ちわからないよ！」

いつも大人しいフェイトがここまで声を荒らげるとは、ストレスの恐ろしさを改めて体感した。

「君は母さんに捨てられた事無いくせに！・・・もう放っておいて！いつも楽観的で何でも出来て射撃魔法の達人で特別なスキルを持つてる君と私は違うんだ・・・。」

「・・・ひとつ良いこと教えてやるよ、俺はお前と一緒に親に捨てられた、それもお前と違って魔力資質がなかったし当時の俺はお坊ちゃん育ちでそれこそ何も出来なかった、だけど俺はずっと前を向いてりや良いことがある、そう思っずと前向いて来たそしたらいつの間にか自然と仲間も出来たし会社も作れた・・・何て言うかそうだな、前向いてりやいつか良いことがある、だから人生諦めるな迷ったなら俺と一緒に答えを考えてやってもいいし、愚痴だつて聞いてやるだからもう少し頑張ろうぜ？」

柄にもないことを言ってしまったが、過去の自分と重なってしまい放って置けなかった。

「ごめんなさい・・・私酷いこと言ったよね・・・やっぱり私は・・・痛っ！？」

全部言い切る前にフェイト額にデコピンした。

「バー力俺が話したくて話ただけだし、それから要らん気遣いは

無用だ、少しの間だったけど俺とフェイトはもう仲間だろ？」

そう言うとなフェイトの顔は明るくなった。
もう心配は無いだろう。

「ありがとう君のお陰で何だかもう少し頑張ろうって気持ちになれたよ。」

「そりゃよかった、もう自分一人で悩むなよ？アルフだって居るんだし・・・あー忘れてた俺はレヴィアス・フォン・シュバルツラングこれが本名だ、宜しくなフェイト・テストロッサ。」

そう言うとなフェイトに背を向けイリスのところに向かった。

第7章 終結（後書き）

ここまで読んで下さった皆様ありがとうございます！

引き続き更新がんばります。

第8章 発覚

フェイトを慰めた後、イリスのお見舞いに行った。

「調子はどうだ？」

「うん？絶好調だよ？魔法は当分使えないみたいだけどね・・・それよりフェイトは大丈夫だった？」

「あいつは一番重症だな、まあ俺みたいな間違いは起こさないだろうさ・・・後、俺明後日頃から囑託魔導師試験に行くから暫くいないけど、フェイトの相談とかのつてやつてくれ頼むぞ。」

そう言う俺は、イリスの病室を後にした。

アルフにも廊下であったが、いつも通り元気いっぱいにて特に気にする必要は無さそうだった。

「よう！高町とそのついで、元気か？」

「うん！私は元気だよ！」

「誰がそのついでだ！だ・れ・が！！」

「これだけ食いついて来るってことは元気だな！」

若干ユーノの機嫌が悪いようだが何時もの事だっ気にしない。此処でもフェイトのことを頼み病室を後にした。

「元気か？」

「出てって、貴方とは話すこと一切無いから。」

どうやらまだプレシアを撃って捕まえたことに対して怒っているようだ。

「いい加減許してくれよ。」

「嫌だ！絶対嫌だ！」

「そうか、残念だ腹減ってるだろうと思ってお前の好物の肉まん買ってきたんだが・・・そうか仕方がない俺が全部食おう。」

買ってきた肉まんの袋を開き中にあつた肉まんを頬張った。

「うめえなこれ。」

「いいよ〜だ、私はお腹なんて空いて・・・。」

そのときアリシアのお腹がぐ〜と可愛く鳴った。

その瞬間思わず肉まんを吹き出しそうに鳴ったが何とか喉を通すと笑った。

「イヤ！ち・・・違うの！今は・・・。」

恥ずかしいのか顔が真っ赤になっている。

笑いが収まった頃を見計らい、もうひとつのビニール袋を渡した。

「肉まんやるよ、しっかり食べて速く元気になることそれがイリスからの伝言だ、じゃあな。」

そう言うつと席を立ち扉に向かっていった。
するとアリシアに呼び止められた。

「まだ何か用があつたか？」

「その・・・肉まんいつもありがと・・・。」

そつぽを向いているが、感謝はしてくれているようだ。

「どういたしまして、じゃあ失礼する。」

そう言うつとリンディの元に向かった。

「あら、もう準備はいいの？」

「ああ、一通り終わったから問題ない、3日過程だができるだけ速く終わらせて来る。」

そう言うつとリンディは誇らしげにこちらを見ながら敬礼してくれた。
そして試験会場に向かった。

試験会場には比較的低年齢の人物が集まっていた。

試験内容は筆記、魔力量測定、簡易な模擬戦である簡易とはいえ相手は管理局員だ油断はできないだろう。

そして筆記試験が始まった。

筆記試験が終わると、直ぐに魔力量試験になった。

此处ではリンディから言われていたので目立つのを避けるため、予め魔力量をリミッターを付けることで魔力量を落とし審査に望んだ。

がこれもなんなく終わった。

次に戦闘技術の審査がはじまった。
相手は恐らくA Aランクほどだろう。
これぐらいの相手なら余裕なのだが、魔力の関係上正直一歩間違えれば敗北するだろう。

「よろしく願います。」

一応試験なので礼儀正しく挨拶をしておく。

「ご丁寧にも、試験官のルディアです。」

「ああ、受験番号1990番、レヴィアスです。」

良くはわからないが恐らく同い年位の少女だろう、此处では儀式魔法や戦闘技術を審査するらしいが、この歳で管理局の試験官になるとはかなり優秀なのだろう。

「儀式魔法はこれでいいか？」

「はい、バッチリです！次は私と模擬戦です。」

そして、会場に連れていかれた。
会場は森林で比較の見通しが良くないが、身を潜め奇襲を狙うには最適だ。

「制限時間50分それでは開始します・・・よいスタート！」

そして試験は始まった。

相手は剣型のデバイスで近接型、武器はベルカ式だろうか？
カードリッジシステムのような機構が見受けられる。

「騎士か？」

「まだ見習いの身ですが、一応騎士です。」

「まあいい、じゃあ始めるか。」

そう言い残し俺は森の中に身を潜めた。

追いかけるのは危険と判断したのか上空からサーチャーを飛ばし探索している。

俺はM82A1を構え上空にいるルディアを撃った。

確実に当たったが魔力を抑えてるせいかさほどダメージは無いようだ。

「さすが、リンディ提督の推薦を受けるだけあって、狙いがいいですね確実に急所を狙ってくる。」

「埒があかないな、魔力が落ちて弾に威力が無いにしても、このままでは……。」

内心ではかなり焦っていた、狙いは正確なのだが、どこから狙撃しても外されたり回避されたりのリターンは返さなかった。

「誘導弾にしてみるか……いや、炸裂弾だな。」

そう言うと、カードリッジを3発使い炸裂弾を生成し撃った。
案の定ルディアは弾をデバイスで弾こうとデバイスを振り抜いた……

・がそれが仇となった。

切り裂かれたことで外郭が破れ、中に積めておいた魔力弾が炸裂し、ルディアを襲った。

「クッ！しかし！やっと見つけました！」

「チッ！場所がばれたか。」

草むらから飛び出しすぐさまワルサーP99と腰のデバイスに改造したナイフを引き抜き近接戦闘の準備をした。

「こそこそ隠れてしか戦えないのかと思っていましたが、ちゃんと戦えるみたいですな。」

「俺も一応騎士の端くれだったからな、それなりに近接戦闘の心得はあるぞからな、甘い考えは捨てて覚悟して来た方がいい。」

ルディアと同じ高さまで上がると銃を向けた。

「わかりました、ルディア・フォン・シュバルツラング本気で行かせていただきます！！」

「シュバルツラングだと！？」

これは後から少し事情を聞く必要があるそうだ。

そんなことを考えていたせいか、ルディアとの間合いは既に10mを切っていた。

「はあ！」

「つと！？」

危なかったこの身体の身体能力がなければ反応が出来ていなかった。背筋がヒヤリとしたが、未だルディアの猛攻は続いているが、すでに目は追い付いているので受けるのは簡単な事だった。

「基本的に忠実だな？いつか足元をすくわれるぜ？」

「いいえ、そんなことはありませんシュバルツラング流においてその様な事は絶対に。」

「それじゃあ、こうしたらどうする？」

今まで受けていた刃を受け流し、空間転移でルディアの背後に回り首筋にナイフを当てた。

「そんな！？どうやって！？」

「相手のスキルと練度を見謝るところなる、実際の戦場ならお前ざつと数えてたけど28回の死亡と230回の重軽傷だな。」

「そ・・・そんなはずは・・・私は完璧だったはずですよ！」

「所詮は教えられたままやってるだけで全部教本通りだ、回避先も太刀筋も見え見えだから、駄目だもつと応用とアレンジを加えた攻撃と柔軟な対応をしないと、この先命を落とす事なる。」

彼女の攻撃はすべて過去教官に教えられたことや教本に書かれてい

る事に忠実すぎるため、回避先も太刀筋も容易に読むことができた。

「いえ！それでは納得がいきません！戦闘継続をお願いします！」

「無駄無駄、今のままのお前と戦っても結果は同じだよ。」

「それでも！」

「あゝうるせえ！つか今俺の試験だよな！？何で俺が教官みたいな事しなきゃいけないーんだよ！？」

俺は髪の毛を掻きむしりながら言った。

それで正気に戻ったのか納得はしていない様だが、押し黙った。

「す・すみません・私としたことが・みつともないところをお見せしてしまいました。」

「まあ、練習相手位ならいつでも相手してやるし悪いところも教えてやる、だから今回はおとなしくしてくれ。」

「あの、御名前と連絡先をお願いします！」

「俺か？名前はレヴィアス・フォン・シュバルツラング、連絡先はアースラに頼む・・・じゃあな。」

呆けた顔のままのルディアを背に控え室に戻り結果発表を待った。

そして結果が張り出された。

そこには合格者の受験番号が記載されていた。

一番下の方に1990番もあった。

結果は合格だった。

これで、晴れて無罪放免だ。

《あゝリンディ提督？無事受かりましたので、明日そちらに帰投します。》

《了解、おめでとうそれじゃあ明日は皆でパーティーね！》

《それじゃあ、ちょっと用事があるんで、切ります。》

そして後ろを振り向いた。

すると執事風の男3人に囲まれた。

「これはこれは・・・いったいどのような御用件で？」

「お前がレヴィアス・フォン・シュバルツラングだな？一緒に来て貰おうか？」

「ジャック、ジョン、マイクお前達が来たって事はあそこの車にはお嬢様が乗ってんだろ？」

「その通り、さすがレヴィアス様ご明察です。」

「旦那様に連絡したところ、話があるそうで。」

「お前らホントにめんどくさいな、行かねえって言ったところで無駄なんだろ？着いてつてらやるよ、お前ら3人の相手はダルいし。」

そう言うと言手マイクが車のドアを空けてくれた。

「ありがとよ、それからまあ会いましたねえ、ルディアお嬢さん。」

「先程はどうも。」

そんなやり取りをしているとマイクが車を発車させた。

「俺一応親父に捨てられてんだけど、今更何を話してくれるんかね？」

「着きましたよ、お坊ちゃん、お嬢様。」

ドアを空けそとに出ると目の前に二度と帰ってはこれないと覚悟した筈の家があった。

「只今帰りました、父上、母上。」

「父上、一度は帰って来るなど、仰いましたよね？それが、どういう風の吹き回しですか？」

俺は呆れながらいうと、父上はこちらを見ながら言った。

「レヴィアス無事で、何よりだその顔は変身魔法か何か？」

「そんな事どうでもいい、父上！つ聞きたい事がある、こいつは何者だ。」

「レヴィアス、彼女は養女だ。」

「出来損ないの俺の変わりに優秀な養女を引き入れ、管理局に入局させ働かせる代わりにベルカ自治区の存続を希望するわけか・・・もういい、好きにしろこの家の事なんか俺の知ったか。」

俺は背を向け、門に向かった。

今は父が一番憎たらしい、結局二言目には自治区の存続がどうのと・・・まあ考えたところで無駄なのだが。

あの一堅物（親父）は結局こちらの事など考えていない、寧ろ奴からしてみれば俺は使えない駒でルディアは優秀な駒でしかないのだろつ。

それが今回の模擬戦でルディアを倒したため、使えない駒から使える駒にランクアップしたと言うところだろつ。

「まあ、関係ないないさ。」

ちょうど門をくぐった辺りだった、後ろから誰かが追いかけてきた。

「おや、母上に優秀なお嬢様どうしたんで？」

「レヴィアス、この子の教官として暫く此処に残れないのですか？」

「母上、それは無理です俺にはもう帰る居場所がありますので。」

「そうですか、わかりました近タルディアをアースラに増強要員として送ります、父上には修行のためと言っておきます。」

何だかめんどくさい事を押し付けられているような気がするが、まあクロノやリンディ提督が何とかしてくれるだろつ。

「それでは、俺は行きます・・・体には気を付けろよ?」

そう言い残し俺は実家を後にし、アースラを目指した。

第8章 発覚（後書き）

ここまで読んで下さった皆様ありがとうございます！

第8章いかがでしたでしょうか？
引き続き更新がんばります。

次回もよろしくお願いいたします！！

第9章 襲撃

数日が経ち、アースラに戻ると何故かあわただしく局員が動いていた。

「どうしたんだ？」

「レヴィアス君いいところに！悪いけどフェイトちゃん達と一緒に海鳴に降りて！なのはちゃんと通信がとれないんだ。」

「今年はやっぱ厄年か・・・わかった、それじゃちょっと遠く離れたところに降ろしてくれ。」

そう言い残し転送ポートに走った。

たどり着くとちょうど準備ができたらしく入ると同時に転送された。

「ここか・・・。」

スコープを覗くとなのはがビルに叩きつけられていた。

砂煙が晴れ視界がクリアになると迷わず赤い魔導師に向け引き金を引いた。

白銀の弾丸は真っ直ぐ飛んでいき赤い魔導師の少女の振り上げた腕に直撃した。

《フェイト、ユーノ頼む！》

そう指示するとスコープ上にフェイトとユーノが現れた。アルフも既に奇襲ができる位置についている。

敵は1人それに利き手と思われる腕に怪我をしているのに対しこちらは万全の状態の4人勝負は見えている。

「後は余裕綽々だな。」

そう呟くとちょうど確保に成功したようだ。

「後はもう大丈夫か・・・それじゃ、退却・・・。」

「動くな、動けばお前の首が飛ぶぞ？」

「物騒な事をいうな・・・でも、俺のスキルを把握してないのはア
ンタのミスだな。」

そう言うのと、空間転移を使い背後に回り銃を突き付けた。

「何んだと？」

「さあホールドアップだ、武器を棄てて貰おうか？」

「嫌だと言ったら？」

「撃つだけだ。」

その言い終わるとほぼ同時に射線から今まで狙っていた頭が消えた。
それと同時に視界に何かが入り咄嗟に屈んでよけた。

「あぶねえだろ！」

言い終わると同時にワルサーP99の引き金を3度引いた。

銃口が光り凝縮された魔力弾が3発、発射され剣を持った騎士に襲いかかった。

「レヴァンティン！」

デバイスの事であろう名前を言うと、デバイスから空薬莖が1発排出された。

「紫電一閃！」

騎士の1振りですべて弾迎撃されてしまった。

負けじとマガジンが切れるまで撃ってみたがどれも回避されてしまった。

「畜生、なら近接で勝負だ！」

腰のナイフを鞘から引き抜き構えた。

頭に血が登り前方の騎士に集中していたため、背後の敵に気づかなかった。

「でええりゃ！！！」

「しまった！ガハッ！」

腹に拳を叩き込まれ数m後方に飛ばされた。

まるで肺の中の酸素をすべてもって行かれるかのような感覚だった。

飛ばされた際に頭を打つたらしく、視界がぼやけていた。

「畜生が！！！」

銃を構えたがいつものような照準がつけられない。

何度か無差別に撃って見たが当たっていない様だ、そしていつの間にか全弾撃ち尽くしたことを示すように、スライドが開いた。

「畜生、弾切れか……。」

壁にもたれ掛かり銃を横に置いた。

……ここまでか……。

足音は確実にこちらに近づいてきている。

今回ばかりは確実に終わった、今まで何度も戦場に行き死にそうになった事も多々あるが、今回ばかりは駄目だ、逃げ道がない。

「ようやく見つけたぞ……さて、それではお前のリンカーコアをもらうぞ?」

「嫌なこつた。」

相手を睨み付けながら言うと、左肩に何かが有るのを思い出した。

……あるじゃないか、現状を打破する物が此処に……。

すぐさま肩のポケットからマガジンを取りだし、ワルサーに装填し驚く二人を他所に、引き金を引いた。

すると銃口から9mmパラベラム弾が発射された。

魔力弾とは違い、弾足が速いので人間の目で捉える事は不可能だ。

久しぶりの一リコイル（反動）と乾いた発砲音と火薬の匂いがあった

た。

騎士の右肩を狙い撃ったが右肩を貫通し後ろに居た守護獣の腹部にあたった。

「グッ！！ザフィーラ！！貴様・・・何をした！」

「これを撃つただけだが？」

騎士は出血している右肩を押さえながら、ザフィーラと呼ばれた守護獣の所に向かって行き左肩に担ぐと逃げ去って行った。

《あゝリンディ提督？ちょっとここに医療班を寄越してくれないか？》

《わかりました、なのはさんの次にそちらに向かわせます。》

《なのはは酷いのか？》

《リンカーコアが異常に小さくなっているの、だから多分。》

《被害にあったんだな？まあ、そっちが片付いたらこっちに回してくれ、発煙筒は焚いておくから・・・俺はちよつと寝る。》

そう言う意識は闇の中に落ちていった。

「クソッ！なんで弾が無い！！」

既に手元の弾は切れている、それに対し相手は6人それも皆銃を携行している。

「そこまでだ。」

「チツ・・・ついに俺の番が来ちまったか・・・。」

溜め息混じりにそう言つと、目を閉じた。

乾いた発砲音がしたかと思うと人が倒れる音がした。

「いや、今回ばかりは駄目かと思つたけど助かった、ありがとなセツナ。」

「気にするな曲がったら敵が居ただけ、気にしないでいい。」

「はやく仕事終わんねえかな？」

「まだ暫くは続くと思う、政府軍の拠点はここだけじゃないし。」

「こんなことしてなんの意味があるんだろうな？」

ふと疑問に思つた事を口に出してみたがセツナは「さあ？」と誤魔化すだけでなにも教えてくれない。

すると視界に何かが転がって来たのが見えた、それは戦場ではよく見かけるもの、手榴弾だった。

「なっ！！」

セツナは俺を突き飛ばした。

そのせいで、2階の窓から転落したが、幸い雨が降っていて地面が

柔らかかったのと枯れ葉や枝等がクッションになりたいした怪我はなかった。

そして着地と同時に手榴弾が爆発し、中から発砲音がした。暫くすると発砲音はしなくなった。

それと同時に俺も逃げた敵の増援が来たからだ、それから逃げた、山や川を走り逃げた。

そして何とか逃げきり司令部にたどり着き状況を伝えて、増援を頼んだ。

何とか拠点を制圧したが、拠点内からセツナの遺体は発見されなかったがどんどん運ばれてくる元仲間だった者達をみて何とも言えない気分になった。

その後その組織から抜けた。

「あゝ夢か・・・クソッ・・・雨が、嫌なことばかり思い出すから嫌いだ。」

「隙ありい！！」

「あ？痛ッ！！テメエ何しやがる！！」

何故だかわからないがこの金髪赤目チビ助は生意気にも俺の頭にデコピンをして来やった。

「泣いてるみたいだけど元気でした？」

「ん？ああ、ホントだな。」

いつのまにか涙が出ていることに気づかなかった。

「ってか何でお前がここに居るんだ？」

「まあ、妹がお世話になった人を姉としてほっとく訳にはいかないし。」

「気にする事はない、手伝ったのだって成り行きからだし、俺なんざなにもやってないし。」

そう言うのと立ち上がりアリシアとともに、リンディの所に向かった。

「そう言えばさっきは何で泣いてたの？」

「昔、俺が無力なのを思い知らされた事件を夢見たただ、気にするな。」

「そっか。」

アリシアはそれ以上追求はしてこなかった。

暫く双方ともに黙った状態が続きいた。

そしてリンディのいる所にたどり着いた。

「二人ともお似合いね？」

「そんなこと無いと思いますが？」

「そ・・・そうだよ！絶対お似合いなんかじゃないよ！」

リンディがやたらにやけていたような気はするが、気にしないで真面目な話をすることにした。

「んで、あの連中は何者なんです？」

「彼女達は第一級搜索指定ロストログア“闇の書”に搭載されている“守護騎士プログラム”と呼ばれるシステムだ。」

リンディの代わりに後ろからやって来たクロノが言った。

「まあ、本来主を守るためのだけのプログラムなんだが……。」

「言いたい事はわかった、ところで高町は大丈夫なのか？」

「ええ、リンカーコアが異常に小さくなっているけど命に別状もないそうよ、暫くは魔法が使えないみたいだけどね。」

流石は艦長、人員の状態は完全に把握しているようだ。

「んで？今後の対策は？」

「今後の対策として、なのはさんの魔力が戻るまでの護衛と被害状況がすべて地球を中心に個人転送可能な距離だし、アースラのメンテナンスもしなくてはならないから暫くは地球上のなのはさんの家の御近所に本部を置くことになるわね。」

「了解、その指示に従う。」

そう言うとその場を去った。

第9章 襲撃（後書き）

ここまで読んで下さった皆様ありがとうございます！

引き続きグダグダではありますが、がんばりますので、次回もよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9288x/>

魔法少女リリカルなのは～Broken my destiny～

2011年11月9日08時10分発行